

本来の友情の形

～生物であり動物である人間の私たちはどう考えるか～

哲学班

第一章 友達と親友の違い

Instagram、twitter、YouTube に LINE。ここ数年で普及したいわゆる SNS の媒体というのは、劇的な進化を遂げ、いまや私たちにとって必要不可欠なほど身近な存在になってきました。今や私たちの生活の中の支柱となっていることは、現代人にとっては共通の認識であり、もはやそれを否定する人はいない現状に達するまでに、世間に浸透しているものと言えるでしょう。古来より相手と会えない間でも繋がろうとする努力は今の今まで続けられてきました。古代人の狼煙から始まり、紙を媒体にした手紙が普及して、1870 年代に電線電話の開発、そして私たちがよく聞くネットワーク・インターネットというのは 1940 年より使用され、そして今でも私達をつなぐ手段として使われているものといえるでしょう。しかし、昨今、インターネットの使用の形は変わってきているものと考えられます。本来、アナログ世界の人とのやり取りをするための機関だったものが、今ではデジタル世界で人とつながるためのものとして使っている、という意見も主流になってきています。そこで我々は考えました。アナログの友情とデジタルの友情、それらの本質は同じであるのか。すなわち、「本来の友情の形」とは一体何なのだろうかと考えるに至りました。そして、それを考えるために、まず初めに「友達と親友の違い」を一つ目の問いとし、考察することにしました。それに伴い、私たちはこの問いについて自分たちなりの予想を立てました。

まず一つ目に、相手と過ごす時間が増えることで相手のことをより理解し、お互いに心を開けることができるはずだと考え、友達と親友の違いにはどれだけその相手と時間と過程を過ごしてきたかにあるのではないかと考えました。

そして二つ目に、その相手との信頼の度合いにあるのではないかと考えました。相手のことを信用しているからこそ、その信頼に伴った行動をすることができ、それに相手も答えてくれることで、よりお互いの信頼感が深まるのではないかと考えたからです。

最後三つ目に、相互理解が深まっているかどうかにあるのではないかと考えました。互いのことをよく理解しあっていることが、相手と親密にかかわるかを決めるカギになるのではないかと考えたからです。

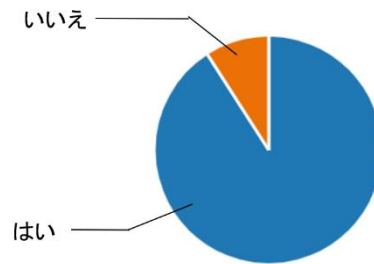
これらの先行予想を踏まえたうえで、アンケートの結果と比較していきたいと思います。

まず、私たちは「親友と思っている相手はいますか」というアンケートを取りました。

その結果は、はいが 80 人、いいえが 8 人というものになりました。

はい：80人

いいえ：8人



はいと答えた人たちの中で多かった例は、

長い付き合いである

価値観、趣味が合う

一緒にいて楽しいと思える

信頼している

等が挙げられました。

そしていいえと答えた人には「あなたにとって親友とはどのような存在ですか。」という新たな質問をしました。その中では

大切な存在である

といった意見が多く見受けられました。このアンケートでいいえと答えた人たちに一貫していたのが、親友という存在をある種、特別視しているという点でした。

それでは、私たちが最初に建てた予想と、アンケート結果との相違を探っていきます。

ですが、その前にまず大前提として、哲学というものにはっきりした正解というのはありません。大多数が賛成しているからその意見が正しいというわけでもありません。ですが、皆さんの考えとの照らし合わせをしていかないと、正解ではなくとも答えを出すことができないので、ここでは私たちの考える友達と親友の違いの物差しで測って考えていきたいと思えます。

まず予想との相違ですが、私たちが建てた予想とアンケートとの結果は大部分当たっていました。

一つ目の「どれだけその相手と時間と過程を過ごしてきたか」という予想は、アンケート結果の、幼馴染という意見も含む、長い付き合いであるという意見と合致しました。

二つ目の「その相手との信頼の度合いにあるのではないか」という予想は、アンケート結果の、相手に何でも話せるという意見も含む、相手のことを信頼しているという意見と合致しました。

三つ目の「相互理解が深まっているかどうかにあるのではないか」という予想は、アンケート結果の、趣味が合うという意見も含む、価値観が合うという意見と合致しました。

そして、いいえと答えた人たちの意見については、どの回答にも共通していたのが、「親友に対する特別感」でした。

つまり、実際に自分に親友がいると考える人にとっては身近な存在であるからこそ、ある意

味大それた「特別感」というものはなく、自分に親友がいないと考える人にとっては「特別感」というものが、より親友を親友と判断する基準を厳しくしているのではないかという考えに至りました。

そこで私たちは新たな問いとして、そもそも「友情とは何か」ということについて考えることにしました。

第二章 友情とは何か

それに伴い、私たちはこの問いについて私たちなりの予想を立てました。

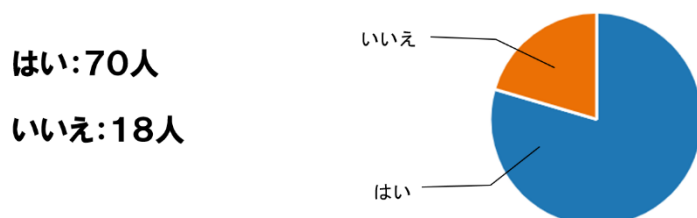
私たちの考える友情というのは「どの生物も持っている共通の認識であり、人間が言葉を通して本来の意味を曲解したもの」であるというものです。

つまり、私たちの想定では動物間の友情はたとえ別種であろうとも発生するのではないかと考えたのです。

これらの先行予想を踏まえたうえで、アンケートの結果と比較していきたいと思います。

まず、私たちは「人間と人間以外の友情は成立すると思いますか。」というアンケートを取りました。

その結果は、**はい**が70人、**いいえ**が18人というものになりました。



はいと答えた人たちの中で多かった例は、

人間以外にも感情はある

ペットと仲がいい

実際に友情が成立しているのを見たことがある

等が挙げられました。

そしていいえと答えた人には「成立するためには何が必要だと思いますか。」という新たな質問をしました。その中では

会話によるコミュニケーションが必要である

同じ言葉を用いる必要がある

といった意見が多く見受けられました。

それでは、私たちが最初に建てた予想と、アンケート結果との相違を探っていきます。

まず事実として皆さんに伝えておきたいことは、「鳥類・哺乳類には感情が存在し、そして

それら以外の生物は感情を持たない」というものです。

逆に言えば、鳥類・哺乳類には感情があるため、科学上友情は成立するという事です。つまり、私たちが最初に建てた「人間が言語を通して本来の意味を曲解している」という予想はあったことが分かりました。

ただここで注意しておいてほしい点としては、「ペットと仲がいいから友情が成立する」というのは違うということです。あくまでペットは人間が飼育しているというところにある為、主従関係であり、友情ではないというのが私たちの見解です。

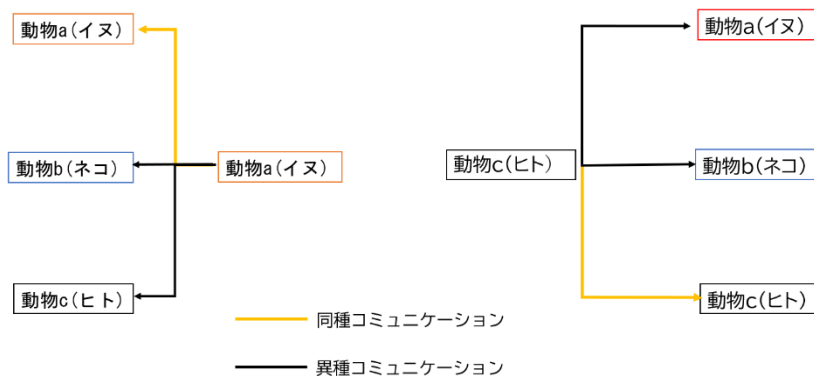
そして友情を発生させるには会話が必要であるという意見は、あっていないと考える結果に至りました。なぜかといったら、友情、すなわち感情というものは哺乳類が本能として持っている感覚であり、言語を介することでしか発生するものではないと考えることができるからです。

それではここからはこれらの事実を踏まえた考察をしていきたいと思えます。

先ほどのアンケートの結果では人間とそれ以外の動物で友情は成立するかどうかということを知ったものを提示しましたが、人間とそれ以外の動物で友情は成立しないと考えた人たちというのはある意味でいうところの現実主義のような考え方、つまり実践派であるというように考えることができます。そしてその逆である、人間とそれ以外の動物で友情は成立するという考え方はある意味感覚派であると、捉えることができます。しかし、感情というものの自体がそもそも感覚的なものであり、哺乳類の生物すべてが持っているものと考えると、それらを人間のものにしようとする働きは意味を持たないのではないかと考えることができます。そう考えたときに、感情を言語で翻訳しなければ理解することができないという考えは、そういったわけではないということが分かります。つまりこの場合は、人間と動物でも友情は成立すると考えること、友情を感覚で感じるものが限りなく正解に近いのではないかと考えることができます。それは決して言語による理解のみが及ぶ範囲ではなく、中には科学的な事象ですら追いつかない神秘のようなものが内在すると考えられます。そう考えたときに、友情、すなわち感情というものが言語を通さねば理解することができないというのは、別にそういうわけではないと思えます。

今、私たちが述べたこととしては「人間とそれ以外の友情は成立する」というのが結果にはなっていますが、しかしここで一つ確認しておいてほしいことがあります。それは、決して同種族の友情と異種族の友情というのは同じではないということです。

こちらの図を見てください。



同種コミュニケーションというのは、この図の黄色の線で繋がれているものの通り、同じ種族間で発生するコミュニケーションのことです。そして、黒の線で繋がれているものは違う種族間によって行われる異種コミュニケーションを表しています。この図を通して何を伝えたいのかというと、異種コミュニケーションというのは先ほど言った「感情」を媒介してとるものであり、私達が普段行っている言語コミュニケーションというのは同種コミュニケーションの内の一つであるということです。私たちは犬の鳴き声の意味を知ることができませんが、イントネーションで、怒っていたり、喜んでいたり、悲しんでいたりが「なんとなく」分かると思います。この「なんとなく」という感覚こそがまさに感情を媒体にした異種コミュニケーションを表すものであると考えることができます。それと比べて言語コミュニケーションというのは、言葉が意味を持って意思をつたえる媒体になっていると考えることができます。つまり人間が行う言語コミュニケーションというのは、感情を媒体として成り立っているものではないので、むしろ相手の感情がよく伝わりにくくなっているのではないかと考えることもできます。

今までの話をまとめると、友情とは鳥類・哺乳類が生まれつき持っているものであり、人間が『言葉』に神聖的な意味を持っているがために分かりにくくなっているが、『言葉』もあくまで私達人間が持っているコミュニケーションに過ぎないということになるということです。

そしてこれら二つの考察を踏まえ、私たちは本題である「本来の友情のあり方」について考えました。

第三章 本来の友情のあり方

「まず本来の友情のあり方」を考えるうえで、人間は哺乳類の中でも群を抜いて異質な存在であるという前提があります。何がそこまで異質なのかといえば、人間には「理性」があるということです。この場合の理性というのは端的に言えば自分の気持ちに嘘をつくことができることを表しています。これらの友情との関係を、例を挙げて説明します。

犬はほとんどの哺乳類の中でもかなり賢い部類の動物であり、「お手」や「お座り」などのように人間が指導することによって芸を身に着けることもできるほど賢い動物です。しかし彼らは嘘をつくことができない、すなわち理性がないと考えることができます。でも、ご飯を「待て」する芸は自分の気持ちを我慢しているのではないか？という意見もあると思います。この場合の理性というのは自分の気持ちを押し殺して行動に移したり、感情を表現することができるかどうかのことを指します。もっと簡単に言えば「演技をできるかできないか」というのが、はっきりとした人間とその他の哺乳類との違いではないかと考えることができます。そして犬は自分の気持ちを押し殺すように演技をすることができないので、自分の気持ちを相手に率直に伝える手段しか持ち得ません。つまりこれは感情を媒体にしてコミュニケーションをとっているということになるのです。

それに比べて人間はと言語を通してコミュニケーションをとっています。ということはつまり人間は全生物の中で唯一、感情を媒体にしてコミュニケーションをとっていない生物であるということなのです。これというのは人間という一生物が友情という、形を持たない感覚を曲げていることに直結することになると思います。

であれば、私たちは本来の友情の形を成り立たせるためにどのようにあるべきか、ということですが、大事とするべきことはたった一つだけです。それは相手に対して自分の意思をまっすぐぶつけるということです。一つ例を挙げて説明します。

今あなたは友人とともに食事をしに来ていて、そこで友人はレストランに行きたいと、そう言いました。しかし、あなたの本心はカフェに行きたいと言っています。ですが友人は、あなたのカフェに行きたいという発言に対してどういった反応をするのかというのは無論わかりません。そこであなたは「相手に従って自分もレストランに行こう」と考えた。私たちがよく陥りがちな状況であると思います。これというのはまさに自分の気持ちを相手にまっすぐ伝えていない、本来の友情の形とは真逆の方向の事象が起きていると考えることができます。

そして次に本来の友情の形を成り立たせるためにどのようにあるべきかという例を出します。

先ほどと同様、友人は昼食にレストランに行こうと提案しました。しかし先ほどの例とは違い、あなたは友人に対してカフェに行きたいという提案をします。そしてその意見に対してお互いに何を伝えあうのか。というやり取りがここから始まっていきます。これはまさにお互いの主張を発揮していることにはならないでしょうか。これというのはつまり、私たちが想定している本来の友情であり、目指すべきものであると考えます。

私たちが目指すべき本来の友情というのは有利不利で考えるようなものではなく、互いに遠慮にならないよう、常に相手に自分の思いをぶつけるツールであるよう、それらすべてに通ずる「感情」を媒体として人と接することこそが本来の友情なのではないかと考えるわけです。

第4章 まとめ

しかし、それはとても難しいことです。なぜかと言えば、途中で話した通り私達人間には理性があり、それが本来の意思を伝える作業を邪魔するからです。つまり私たちは感覚を媒体としてセッションすべき場面で、理性でそのセッションに発生する感情を抑制していることになります。これが常に正しくないかと聞かれば別にそういうわけではありません。大事な場面ではある程度節度を持って取り組むことも必要なことです。ただ、友情ということになれば話は違います。皆さんは友情を量ってはいないでしょうか。相手を有用か無用かで分けてしまっていないでしょうか。本来の友情というのは私たちが気付く前に発生しているのではないのでしょうか。友情自体に意味を見出そうとしてないのでしょうか。そういったことを考えるとというのが全くの無駄になるわけではありません。しかし、一つ覚えておいてほしいことは、私たちは「人間」である以上に「動物」であり「生物」であるということです。だからこそ「自分たちは特別である」という考え方では、本来の友情は発生しないはずだと結論付けられます。相手も自分も同じ生物であるという自覚を互いに持ち、交流を深めることが正しい友情を発生させるカギなのではないかと思います。